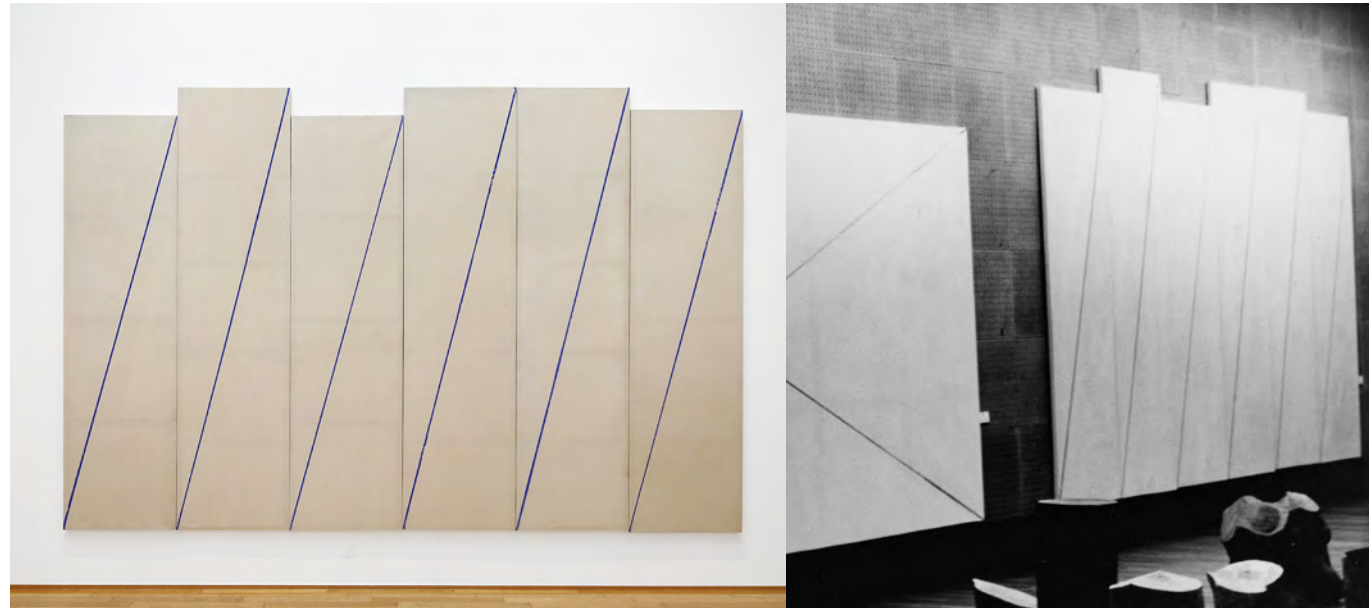




中里斉：1968-1971 東京

Hitoshi Nakazato: 1968-1971 Tokyo



この度、アートコートギャラリーでは中里斉(1936-2010)の個展を開催します。

中里は東京の町田に生まれ、1960年に多摩美術大学油彩科を卒業後、'62年に渡米。ウィスコンシン大学大学院に在籍中、版画やシステム工学の方法論に触発され、抽象絵画の道へと進みます。'68-'71年の日本への一時的な帰国を経て再渡米して以後、ニューヨークを拠点に作家活動を行い、教鞭をとったペンシルヴェニア大学大学院で実験的な版画制作を行うとともに、主軸とする絵画の制作に版画の思考法を援用しながら平面における新たな表現の可能性を追求しました。

生涯を通じて理知的な線と鮮やかな色面による抽象性を貫き、'50-'60年代にアメリカで隆盛したカラー・フィールド・ペインティングの流れを汲む作家として知られる中里ですが、そのキャリアの初期、日本に帰国していた3年間には、モノクロームの直線のみで構成された作品を継続的に発表しています。それは、当時世界的な広がりを見せた既成の価値観に対する抵抗の気運に触れるなかで、作家が自身の制作態度を批判的に検証し、絵画をとりまく既存の枠組みを解体すること、さらにはアメリカで学んだシステムチックな制作理論を取り入れることによって生み出した独自の表現であると同時に、線と色面によるその後の作品展開の原点ともなるものでした。

「なぜ絵を描くのか」「既存の絵の概念を否定した絵とは何か」

これらの根源的な主題に、中里は美術家として、また、社会に生きる一人の人間として、生涯を通じて向き合い続けました。それはまた、絵画と版画という2つのメディア、そして、日本とアメリカ、日本語と英語という異なる文化・言語的背景に身を置いた作家が、双方の特性と差異を照らし合わせることで独自の造形言語を組み立て、それを基盤とする創造行為によって自身の生活を方向づけていこうとする営みでもあり、そこには、つねに自らの居場所を相対化し、目の前の世界について別の可能性を想像しようとする、知性と好奇心に富んだ態度が通底しています。

12年ぶりの個展となる本展では、そうした問題意識に作家が最初に向き合った日本帰国中の初期作品を、初めてまとまった形で紹介します。また、フォーマリズム理論を越えて色面抽象の可能性を模索した'70年代-'80年代にかけての作品とともにそれらを通観することで、中里斉の表現の本質と美術史における意義を改めて探ります。

[左]《用》キャンバスに着色|316 x 485.5 cm (6点組)|1971 [右]「第10回日本現代美術展」展示風景(1971、東京都美術館)

【展覧会概要】

観覧申込：中里斉：1968-1971東京 Hitoshi Nakazato: 1968-1971 Tokyo

会期：2022年9月24日 [土] - 10月22日 [土] *休廊：日・月・祝

会場：アートコートギャラリー 〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F

開廊時間：11:00-18:00 [土曜日-17:00]

◆トークイベント：9月24日[土] 14:00-15:30 建畠 哲(埼玉県立近代美術館館長・多摩美術大学学長)

*定員20名、要事前予約 (info@artcourtgallery.com / 06-6354-5444)

*新型コロナウイルスの感染拡大状況などにより、会期やイベント開催予定が変更される場合があります。

主催：アートコートギャラリー(株式会社八木アートマネジメント)

協賛：三菱地所株式会社、三菱マテリアル株式会社、三菱地所プロパティマネジメント株式会社

【関連情報】

東京でも中里斉展が開催されます。

会期：9/17[土]-10/16 [日]

会場：MEM

〒150-0013

東京都渋谷区恵比寿1-18-4

NADiff A/P/A/R/T 3F

主催：MEM

お問合せ：03-6459-3205

https://mem-inc.jp/

◆ 作家略歴

- 1936 東京、町田に生まれる
- 1960 多摩美術大学絵画部油彩科卒業(BFA)
- 1962-64 ウィスコンシン大学大学院(MS)。専攻として絵画を、副専攻として版画を学ぶ。
- 1964 セント・ジェームス・ギャラリー(ミルウォーキー)にて初個展を開催。
- 1964-66 ペンシルヴェニア大学美術大学院(MFA)。ピエロ・ドラツィオ、ニール・ウェリバーらに学ぶ。この頃、色と形(線)をシステムティックに構成した《ベン・シリーズ》に取組む。
- 1966-68 ロックフェラー三世基金奨学金を受け、ニューヨークにて制作。
- 1968 ヨーロッパ、中近東を旅行し、帰国。10月、多摩美大専任講師としてデッサンを担当。また、駒井哲郎の版画クラスを手伝う。当時の多摩美指導陣には、斎藤義重、高松次郎、東野芳明、中原佑介、針生一郎などがいた。12月、多摩美大は学園紛争により全学封鎖(美共闘)。大学周辺で行われた自主ゼミ等に参加。
- 1970 3月、大阪万国博覧会 古河パビリオン壁画制作(大阪) 東京ビエンナーレ参加のために来日したカール・アンドレを中原佑介が自主ゼミに招く。「芸術が廃止される事はあるか」という針生一郎の質問に対するアンドレの回答「芸術する事は想像する事、想像は歴史の動因、想像を止めると明日は今日の繰り返し」に、表現することの意義を再確認する。7月、「第5回ジャパン・アート・フェスティバル国内展示」(東京国立近代美術館)に大工道具の墨壺を使用してキャンバスに線を描いた作品《Chi Su Ma》を出品。優秀賞(文部大臣賞)を受賞。8月、「第14回シエル美術賞」で佳作賞を受賞。10月、「今日の作家70年展」(横浜市民ギャラリー)に《Ichinchiani》シリーズ5点を出品。11月、日本での初個展を東京、赤坂のビナール画廊で開く。12月、「現代日本美術」(グッゲンハイム美術館、ニューヨーク)に出品。カリフォルニア州立大学バークレー校、フィラデルフィア市民センターを巡回。
- 1971 5月、「第10回日本現代美術展」(東京都美術館)の招待部門に6枚組の大作《用》などを出品。学園紛争の影響で体調を崩す。医者に転地を薦められ、ヨーロッパを旅行し、再渡米。9月、ペンシルヴェニア大学美術大学院で版画の専任講師となる。以後、2008年の定年まで教える。'90年代には同大学美術学部長を5年間務める。
- 1974-75 ニューヨーク州クリエーティブ・アーティスト・パブリック・サービス奨学金を受ける。
- 1982 日米環境都市計画及びデザイン教育財団、オハイオ州立大学の奨励金を受ける。
- 2010 7月15日、自宅スタジオの脚立から落ちて頭部を強打し病院へ搬送される。7月17日午後11時31分(日本時間7月18日)に永眠。享年74。

【主な個展】

- 2010 中里斉展 モダニズム・ニューヨーク⇔原風景・町田 | 町田国際版画美術館(東京)
- 55年後展 | 桜美林学園刑冠堂ギャラリー(東京) [-'10]
- 2009 黒い雨シリーズ I | バジエント・ソラヴィーヴ・ギャラリー(フィラデルフィア) [-'05]
- アイス・ボックス・ギャラリー(フィラデルフィア)
- 2007 村松画廊(東京) [-'78, '80, '86]
- 2002 モントピリアー芸術文化センター(メリーランド)
- 2001 エリクソンギャラリー(フィラデルフィア) [-'99]
- 1999 ギャラリー・ジュリエット(イタリア)
- 1998 50枚のドローイング | ギャラリー KURANUKI(大阪) [-'92]
- 1997 東京画廊、東京 [-'77, '79, '82, '89, '93]
- 1987 中里斉 20年の歩み | 原美術館(東京)
- 1986 AIPギャラリー(フィラデルフィア)
- 1981 中里斉近作展(企画:乾由明) | 甲南高校アートサロン(兵庫)
- 1970 ビナール画廊(東京)
- 1968 チェルトナム芸術センター(フィラデルフィア)
- 1964 セント・ジェームス・ギャラリー(ミルウォーキー)

【主なグループ展】

- 2008 国立国際美術館30周年記念展 | 国立国際美術館(大阪)
- 1995 線について、不在のモダニズム/不可視のリアリズム | 板橋区立美術館(東京)
- 1994 矩形の森 - 思考するグリッド | 埼玉県立美術館
- 1987 絵画1977-1987 | 国立国際美術館(大阪)
- 1984 現代絵画の20年 1960-70年代の洋画と新しい「平面」芸術の動向 | 群馬県立近代美術館
- 1979 現代ドローイング展 フィラデルフィアII | フィラデルフィア美術館
- 1977 アイディアからイメージへ | ブルックリン美術館(ニューヨーク)
- 1973 アメリカの日本作家展 | 東京国立近代美術館 / 京都国立近代美術館 表面の芸術展 | ニューサウス・ウェールズ・ギャラリー(シドニー) / パース 他
- 1971 東京画廊展、東京画廊 第10回日本現代美術展 | 東京都美術館
- 1970 現代日本美術 | グッゲンハイム美術館(ニューヨーク) / カリフォルニア州立大学バークレー校 / フィラデルフィア市民センター(-'71) 今日の作家70年展 | 横浜市民ギャラリー(神奈川) シェル美術賞展(東京) 第5回ジャパン・アート・フェスティバル 国内展示 | 東京国立近代美術館 現代美術野外フェスティバル | こどもの国(神奈川)

【主なコレクション】

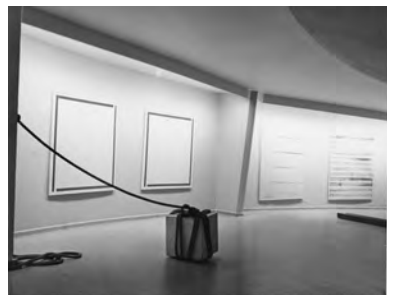
大原美術館(岡山) / 岡山県立美術館 / 九州産業大学美術館(福岡) / 京都国立近代美術館 / 国際交流基金 / 国立国際美術館(大阪) / 静岡県立美術館 / 世田谷美術館(東京) / 高松市美術館(香川) / 東京都現代美術館 / 栃木県立美術館 / 原美術館(東京) / 兵庫県立美術館 / 町田市立国際版画美術館(東京) / 和歌山県立近代美術館 / ティコティン日本美術館(イスラエル) / ナショナルギャラリー(ワシントンD.C.) / ニューヨーク近代美術館 / パーミンガム美術館(アラバマ) / フィラデルフィア美術館 / ブルックリン美術館(ニューヨーク) / ペンシルヴェニア美術アカデミー(フィラデルフィア) / ムーア美術大学(フィラデルフィア) / モンタバル大学(アラバマ)



1970年、ビナール画廊(東京)での個展風景。長尺のキャンバス作品が複数の壁面に2段掛けて展示された。



1970年、ビナール画廊(東京)での個展風景。2000枚のドローイングが重ねて展示されている。



1970-71年、「現代日本美術」グッゲンハイム美術館(ニューヨーク)での展示風景。奥の壁面2点が中里の作品。左から《Ma Su Chi》、《Chi Su Ma》。



1970年頃の中里



◆ 作品解説

日本に帰国していた1968-71年当時、中里はアメリカで遭遇したベトナム反戦運動や教職に就いていた多摩美術大学での学園紛争など、既存の権力や価値観を否定しようとする時代の空気を身をもって経験し、絵画を制作すること自体に懐疑を抱くようになります。他方で「もの派」を含む前衛作家、針生一郎や中原佑介などの美術評論家と交流を重ねる中で「反体制的な態度を、既成の絵画概念を再諮問することと理解して」^{*1}、社会が直面する問題に対する美術家としての応答と自らの表現の方向性を見出そうとします。

「具象的対象物、抽象的形体と色、絵の具という素材、すべて否定してしまった」^{*2}。そうした状況で中里は、描く行為を線を引くことのみ限定し、さらにイメージの形成にシステムを導入する試みから大工道具である墨出し器を用い、墨や粉チョークに浸した糸を画面上で弾いて線をつける、あるいは長尺のキャンバスや2000枚の紙にひたすら線を引くといった^{*3}、従来の絵画技法に依らない方法で平面作品を制作します。一見硬質なその画面は、墨の滲みや粉チョークの飛沫、平行線に挿入される斜めの線、あるいは一度消されて描き直された痕跡など、身体的動作における偶然やシステム上のノイズを思わせる要素が取り入れられることで、行為そのものへの意識づけや平面に内在する時間、コントロールからの逸脱を予期させる、ある種の流動性を孕んだ空間として見る者を惹き込みます。

絵画の存在を極限まで解体し、線を引くという最も基本的で、半ば本能的ともいえる行為を通してその本質に迫ろうとする表現は当時高く評価され、’70年の「第5回ジャパン・アート・フェスティバル国内展示」（東京国立近代美術館）で《Chi Su Ma》が優秀賞を受賞、同年から’71年にかけてニューヨークのグッゲンハイム美術館などを巡回した「現代日本美術」展でも作品が紹介されます^{*4}。「行為」を重視する態度は、対角線を引くことによってキャンバスの矩形に働きかけ、物質の表面から平面という二次元空間を出現させる線のシステムへと結実し、「第10回日本現代美術展」（東京都美術館）の招待部門に出品された《用》（1971年）など、作家が目指した「イリュージョンのためでない、事象としての物質それ自身でもない、平面そのものとしての平面」^{*5}の原点を思わせる力強く簡潔な作品が生み出されました。

その後、中里の表現は線によって分割された領域を彩色し、線と色面、色面と色面の関係によって、自らが解体した絵画空間を再定義することへと移行します。中里が再渡米した’71年、アメリカでは奇しくも抽象絵画がフォーマリズムの限界、すなわち絵画の全てが形式的条件に還元されてしまう危機に直面していました。そのような状況下で、中里は敢えて線と、再び色を制作語彙として選び、具体的な意味の表出ではなく、他方で形式的要素に還元することもできない、「ゲシュタルト的なイメージ、平面としてのイメージ」^{*6}が絵画の内容そのものとして経験されうるような表現を目指し、’70-’80年代にかけての作品を展開します。

「絵画行為というのは、もって自発的に描くこと」^{*7}という作家の言葉通り、境界の塗り残しやオイルスティックで引かれた線の揺らぎ、あるいはグリッドをずらすなど、自らが確立した線と色面のシステムを積極的に異化することによって、絵画の構造と具体的な線・色とが結びつき相互に影響し合う動的な緊張を孕んだ平面空間の数々がこの期間に生み出されました。そして、1987年に原美術館での個展で発表された、鮮やかな色彩と大胆なストロークで構成された画面に、数字や文字、線で示された図形を取り入れた「コンパニオン・ピース」と呼ばれる画面を併置する独自のスタイルによる連作^{*8}は、両者が自律性を保ちながら、その相関関係のなかで平面イメージをより複雑で豊かな空間として経験することを可能にしています。そこには、頭の中のイメージが間接的なプロセスを通していくつものバリエーションとして紙上に現れ、さらには行程ごとの試し刷りによって制作途中の思考や感情の動きを俯瞰することができる版画というメディアで養われた、イメージについての客観的で柔らかな感覚が息づいています。目の前にあるイメージが固定されたものではなく、常に変化へと開かれていることを暗示しているかのような表現は、その後、’80年代の終わりから晩年まで継続されることになる○△□のモチーフを用いて「既知の世界の外」への願望を表した《線外》シリーズへと至ります。

1. 中里斉「インタビュー Bゼミを訪れたアーティストたち」『Bゼミ「新しい表現の学習」の歴史 1967-2004』BゼミLearningSystem編、BankART1929、2005年5月、p.42
2. 同上、p. 44
3. 1970年に東京のビナール画廊で開催された日本での初個展（会期：11月24日-12月5日）では、全て合わせると100m（または50m）の長さになるキャンバスに白墨などを使ってジグザグに線を引いた作品、2000枚の紙を鉛筆による様々な線描で埋めた（2000枚のドロウイング）などが展示された。同展のカタログでは、長尺のキャンバス作品は〈50mの平面〉として掲載されているが、後年のインタビュー（みづゑ no.897、1979）や町田市立国際版画美術館での個展カタログ（2010）では、作家はこの作品を「100mのキャンバス」と呼び、合計100mの長さのキャンバスを使用したと話している。
4. 日本の大工道具である墨壺を使って制作された作品《Chi Su Ma》《Ma Su Chi》（1970）が出品された。前者は原美術館、後者は高松市美術館所蔵。
5. 中里斉「特集 発言’72=創造の原点」『みづゑ』804号、美術出版社、1972年1月、p.48
6. 「中里斉+藤枝晃雄：平面の空間性について - 現代との対話 PART・II - 4」『みづゑ』897号、美術出版社、1979年12月、p.77
7. 同上、p.75。この発言の前に中里は次のように述べている。「カラーフィールド・ペインターというのは、テープをよく使いますね。…小さい筆を使って、コーナーをきれいににする。あのきれいにする行為というのは、僕は絵画行為じゃなくて、何かそれ以外のもののような気がするんです。」
8. 本展出品作《Color from Minas de “Oro”》《7s, 8s and a 9》（1987）など、同じ成り立ちの作品が原美術館での個展に複数出品された。

[主な参考文献]

針生一郎「平面が絵画に反逆する」『中里斉 第2回画廊企画展』（個展カタログ）ビナール画廊、1970年11月

Jennifer S. Byrd, “At the Galleries,” *The Japan Times*, December 2, 1970

中里斉「特集 発言’72=創造の原点」『みづゑ』804号、美術出版社、1972年1月

中原佑介「回想」『中里斉』（個展カタログ）東京画廊、1977年11月

「中里斉+藤枝晃雄：平面の空間性について - 現代との対話 PART・II - 4」『みづゑ』897号、美術出版社、1979年12月

『Bゼミ「新しい表現の学習」の歴史 1967-2004』BゼミLearningSystem編、BankART1929、2005年5月

『中里斉展 20年の歩み』（個展カタログ）、原美術館編、財団法人アルカンシェール美術財団、1987年7月

サンドラ・エリクソン「あいまいさは創造のもと」『Hitoshi Nakazato: Mahakara Series』（個展カタログ）ギャラリー・クラスキ、1992年7月

『中里斉 モダニズム・ニューヨーク⇄原風景・町田』（個展カタログ）町田市立国際版画美術館編、株式会社コギト、2010年6月

Hitoshi Nakazato, *Conceptual Sketches, a Chronology of Exploration*, Muhlenberg College, Frank Martin Gallery, Philadelphia, 1994

◆ 主な出展予定作品



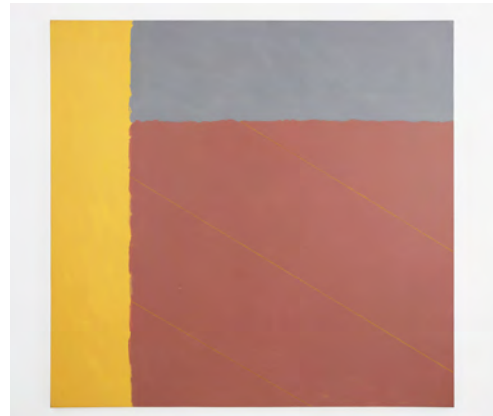
《Untitled》|〈Ichinchiani〉シリーズ
生キャンバスに着色|174.2 x 183.5 cm(各)|1970年

1本線の作品から5本線の作品、計5点からなるシリーズ。アメリカの大工道具であるチョークライナー（墨出し器）を使用して制作された。このシリーズに先立ち制作された〈マチス〉シリーズでは、日本の大工道具の墨壺が使用されている。



《Untitled》
墨、生キャンバス|130.5 x 162.5 cm|1970年

日本の大工道具である墨壺が制作に用いられた。角が丸みを帯びた木枠を使い、キャンバスの側面まで意図的に線を引いている。中里は後年の藤枝晃雄氏との対談で墨壺を使った作品について語り、水平線を5本並べて描く際、誤って線が斜めになってしまい、その後は斜めの線ばかりを描いていたと、行為における偶然を作品に取り入れたエピソードについて話している。（『みづゑ』897号、美術出版社、1979年12月、p.75）



《Color from Minas de “Oro”》
アクリル、油彩、キャンバス|176 x 368 cm(2点組)|1987年

鮮やかな色面構成の画面に、数字を取り入れた「コンパニオン・ピース」が併置される。コンパニオンピースは極めて観念的なイメージだが、ところどころ擦り消され描き直された痕跡が予測できない思考の流れも表している。中里が「最も有効なイメージ・メイキングの場は黒板」*と述べているように、頭の中のイメージを取捨選択・変換・更新といった曲折を経て作品として具現化させていく、そしてそれがまた次なるイメージ＝作品へと繋がっていくという、開かれた絵画行為それ自体の展開図のようにも受け取れる。（*『中里斉 モダニズム・ニューヨーク⇄原風景・町田』町田市立国際版画美術館編、株式会社コギト、2010年6月、p.7）



「今日の作家70年展」展示風景（1970、横浜市民ギャラリー）



《Two Thousand Drawings》
鉛筆、紙|43 x 33 cm|1970年

2000枚の紙を線描で埋めた作品。本展では100枚を展示予定。この作品について中里は「何がそこに描かれているかということよりも、描いた量だけを示したかった」と後年に述べている。（『みづゑ』897号、p.75）



《7s, 8s, and a 9》
アクリル、オイルスティック|87 x 91 cm|1987年

All historical images: courtesy of the Estate of Hitoshi Nakazato

【お問い合わせ】アートコートギャラリー [担当：清澤倫子・灰田] ※ビジュアル資料ご希望の方は、お気軽にお問い合わせ下さい。

〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F TEL:06-6354-5444 FAX:06-6354-5449 E-mail:info@artcourtgallery.com www.artcourtgallery.com